

第二節 神父マノエル・ポルタルの震災詳説 その二

Ⅰ 聖霊修道院 建築、装備、祭具の焼尽

承 前

論文第四 ポルトガル聖職者のリスボン震災記録

第一節 神父ペレイラ・ド・フィゲイレドの震災記録

第二節 神父マノエル・ポルタルの震災詳説 その一

Ⅰ 聖霊修道院 聖職者と居住者の受難

第二節 神父マノエル・ポルタルの震災詳説 その二

Ⅰ 聖霊修道院 建築・装備・祭具の焼尽

聖霊修道院の人的被害に続いて、神父マヌエル・ポルタルは、さらに建物や物品について詳細に証言するが、ここでも宗教的な建築や美術に関しある程度予備知識が必要であろう。

ベネディクト会士である歴史学者デエヴィド・ノウルズは修道院初期の施設についてつぎのように言う。聖ベネディクトの戒律等から復元すれば、六世紀イタリアの修道院は比較的小さな石の建物で、居住する修道士は十五人程度であった。祈祷所、食堂、共同寝室も大きなものではなく、すべて一階に位置した。祈祷所には簡素な祭壇、木製の長椅子と腰掛けだけが置かれる。その建物には台所と各室が付属し、その周りに事務所や納屋は造られたが、回廊はなかった。

以後の千五百年に及ぶ修道院の歴史を通観して、キリスト教建築の権威ヴォルフガング・ブラウンフェルスはつぎのように言う。静寂、謙讓、厳格、禁欲、平和を景仰させる構築は、情熱的で一貫した生活態度を前提とし、すべて修道会戒律の制約を受けている。神を祀り、福音書を朗読する聖堂が、こうした基本構造の中心であって、壮大にして豪華では支配的な建造物に築造される。ついで修道士が共同で戒律を購読する集会室が重要であり、聖俗を兼ね備えるよう整備された。のちにこの集会室は祈祷堂（オラトリオ）として発達し、フィリッポ・ネリによる修道会設立も契機ともなった。また、修道院では食卓において福音書が朗読され、食事自体も救済の方途とされる。共同の食事は最後の晩餐の秘蹟に比せられて、大食堂が第三の地位を獲得するのである。

十二世紀西ヨーロッパで全修道院の頂点に位置したクリュニー修道院では、所属する修道士が三百名を超え、聖堂には千名の参列が可能であった。ローマ教皇

D・ノウルズ著、朝倉文市訳『修道院』平凡社、一九七二年。五〇・五一頁。

ヴォルフガング・ブラウンフェルス著、渡辺鴻訳『図説 西欧の修道院建築』八坂書房、二〇〇九年。一三、一六一―一九、三六五頁。

や多数の枢機卿、各国の君主や王族をも招き、大食堂と大震室の收容人員は千二百名とされる。修道士五一名、修練士一七名を擁する聖霊修道院も比較的大きな規模であり、聖堂と図書館はもとより、大礼拝堂、小礼拝堂、祈祷堂を備えていた。

アルマダ新街のオラトリオ会修道院に関しては、火災による甚大な被害も忘れることはできない。ここで体験したほどの惨憺たる顛末は、他修道院の詳説にもおそらく見出されぬからである。

フォルノス街アヴェ・マリアスから飛火した炎は、十字架像を経て烈しく僧院の裏手へ拡がり、地震で破壊された古修道院を完全に捉えた。ついで聖堂の両身廊と修道士礼拝堂の屋根が燃え、堂宇と回廊に配されたすべて、また神父らの僧坊と配備されたすべての家具が灰燼に帰した。

古修道院の敷地ではとりわけ尊重されるオラトリオ会の建物ふたつが焼尽した。修道士祈祷堂と聖母マリア図書館がそれである。

修道士祈祷堂は広壯で細長い建物で、適度な高さの天井にはフレスコ画法で聖母マリアの昇天とこれを見上げる聖者フィリッペ・ネリが彩色されていた。これら貴重な絵図は私たちを感嘆させるとともに、深い信仰へと導いたのである。祈祷堂では内壁の一部が繊細な彩色タイルで飾られ、そこには聖フィリッペ・ネリの徳行が描かれていた。また、天井への空間に置かれた精妙な彫刻は、フランシスコ・ペドロソ神父や多くの修道士が所望したものである。それらは数々の遺物とともに配置され、修道士フランシスコ・デ・レモスの労によって金箔にされ、銀の輝きも添えられた。同様に祈祷堂の内装には、総大司教猥下のご令弟、フランシスコ・マヌエル様の寄進によるダマスコ織の化身画があり、色鮮やかに描出とともに、豪華な装具と精妙な銀製魚類も配されていた。深い信仰を表わす大きな十字架像も祈祷堂にあった。また、聖具室には聖なる秘蹟と幼いイエス像も収められ、後者は高さ二フィートほどで、初々しい美しい立像、まさしく敬虔で完璧な立像なのである。この幼子については福音と聖母受胎について語る聖アントワーヌの書簡に示

されている。

南フランスのクリュニー修道院では十一世紀後半に修道士が、六十人から三百人と激増し、壮大なロマネスク教堂が建設された。修道士の増加に応じて居室や食堂も当然大規模となるが、こうした修道院建築についてノウルズはとくにふたつの特徴、広大な教会と四辺形の回廊を指摘する。広大な教会が必要であるのは、構成員の多大な数にもよるが、むしろ礼拝、聖歌、行列などの儀式を荘厳にするためである。また、四辺形の回廊は修道院の要であって、構成員の往来や集合に至便な造作である。すなわち、四辺形の上方に教堂、下方に僧坊と集会室が位置し、脇の片側に食堂と厨房、他の片側に客室と倉庫が造られた。

オラトリオ会が独自に造営した最初の建築は、ローマ中心部の聖堂「修道院サント・マリア・イン・ヴァリセラ（シエッサ・ヌオーヴァ）」である。イエスズ会コレジオ・ロマーノを範として、この造営は一五七五年聖堂の建設から着手され、一世紀後修道院の落成によって完成した。境内には広大な聖堂、祈祷堂（オラトリオ）、回廊に囲まれた三つの中庭がある。とくに際立つは楕円形の大食堂であって、著名な建築家ポツロミーニによって設計され、修道士の居住域たる第二中庭と生活の便宜を供する第三中庭の間に配された。大食堂では種々の行事も営まれ、視覚的・音響的效果をも考慮して、楕円形に造られたと言つ。

小聖堂の外側にふたつの門、新回廊の門と聖具保管室の門があり、美事な対比をなして新回廊の上方に男の子を抱く聖ジョセフ、聖具室の上方には聖フェリッペの像が飾られた。後者は被災後緑地の仮設小屋に運ばれ、祭壇に飾られる。修練堂への回廊へ向かう門は祈祷室の正面に位置し、かつて

Manoel Portal, *Historia da ruina da cidade de Lisboa*, pp.18-28. in F. L. Pereira de Sousa, *O*

Terremoto do 1.º Novembro de 1755 e um Estudo Demografico. Lisboa, 1932. Volume III, pp. 616-617

ノウルズ著、前掲、一三三・一三七。

岩谷葉子「ローマにおけるオラトリオ会の成立と修道院建設について

・F・ポツロミーニの『オプス・アルキテクトニクム』を中心に」日本建築

学会関東支部研究報告集 二〇〇一年。四八六・四八八

一夕来臨された国王ジョアン五世陛下が、碑文に記念する言葉を遺された。当時の修道院長マヌエル・ロドリゲス神父の発意により、すなわちフランシスコ・ペドロソ神父、ペドロ・アルベレス神父、ジュアン・アントウネス神父、ジョアン・コロ神父、マノエル・アルメイダ神父、ジュリオ・フランシスコ神父など、すべての高僧が信仰事項について論じ合い、国王陛下が結論を示されたのである。この事蹟に因む祝典を、聖母マリアの受胎を慶賀する夕べに、神学生が行うのが常であった。

加えて一層委細に述べれば、小聖堂に面して琉瑠るりの窓と彩色された扉が祈祷室に一对あり、それらの真中には同じく彩色された円窓が造られていた。真向いの教堂にも回廊へ連なる門があり、説教を勤める方々はそこを通る。礼拝堂は総体的に黄金で飾られ、祭壇の下にローマ教皇から現在の国王陛下に贈られ、聖者の遺骨を納めた金櫃かねひつが祀られていた。

回廊の門には精緻な細片から成る小型の完璧な壁板が生まれ、その一角には男の子を抱く守護聖人の板絵が、ヴィセンテ・デ・バストの配慮で回廊の高さに釣り合うよう置かれた。廊下に沿うすべての窓にも諸聖人を祀る壁龕へきがんが造られ、ドミンゴス・ペレイラ神父による独自の彩色陶板とヘンリック・コレア神父の制作が飾られた。また、別の回廊が門から門へと通じ、その一端は聖歌隊の壇上に直接降りるのである。修練院には屋根を彩色された三つの回廊が配され、修練者の尊師の肖像としてどの僧坊の門口にも板絵が掛けられている。それらは尊師が採録をする姿であり、それに相応しく蔵書も添景とされた。かつて修練者として学んだ頃、僧坊の書籍を増補されたからである。しかし、これらすべては猛火によって跡形もなく焼失した。

ドミンゴス・ペレイラ神父の労苦と精励によって集積されたいわゆる聖母図書館は、適度な大きさの建物であって、その舗床はさまざまな彩色の木材で象眼細工され、中央の台座では七色に映える精妙な宝玉が、鏡のように輝いていた。彫刻された良質の木材で書架が作られ、抽出の上側も黄金の浮彫で飾られる。壁面の上方に貴重な板絵が掲げられ、天井は白色と金色を組み合せ、壮麗な金箔に仕上っている。美しい装幀の稿本はみな聖母マリアを主題とし、比類なく貴重な蔵書である。しかし、震災を免れたものも含め、これらすべてが火災により燃えた。まさしく取り戻せない損失である。

火焰はバルソロメウ・ド・キンタルの聖遺物と列福式の記録をも焼いた。あらゆる聖像もろとも聖堂全体が燃え、若干の聖杯と聖瓶を別として、銀飾

りの貴重な装具もすべて灰燼に帰した。また、四万クルザドにも値し、燦然たるダイヤモンドの円盤に飾られた聖体顕示台、国王ジョアン五世陛下によって献じられ、王族の来臨に際してのみ開かれる顕示台も焼失した。ダイヤモンド、ルビー、黄玉、ガーネットを鑲めた光背全体も同様である。独自の銀細工で作られ、五脚の聖体顕示台もやはり破壊された。しかし、ダイヤモンドを鑲め、八千クルザドに値する聖杯は被害を免れ、偶々居合わせたフランススコ・ルイズ神父の慧眼によって、瓦礫の間から取り出された。表面に見えたものの、運良く盗賊の目もかわしたわけである。当時跳梁を極めた彼らについて、ためらわず言おう。

同じく貴重な玉石で全体を守護され、燦然と輝く黄金の十字架像も燃えた。黄金と細工だけで六百レアルの出費を要したものである。また、やはり貴重な玉石で守護された敬虔なマリア像も冠が焼けた。いずれもヴィセンテ・デ・バスト神父が献じられた聖像である。託身を表徴する堂内のダマス力織装飾、あらゆる中位の燭台、絹糸と金銀の刺繍で飾られた回廊の拱門、オラトリオ会の紋章を金糸で表した織物、ビロードなど他の織物もすべて灰燼に帰した。これら織物は板絵と板絵にある空間を飾っていたのである。三対のダマスコ織の幕、大きな燭台に添えられた飾り紐つき掛布も同じく焼尽した。一対のゴーズ織仕切り、黄金の房を刺繍したビロードの飾り布、外来の紫色の垂れ幕、要するに聖堂全体を包んだ豪華な造作が、悲運にも一片の壁土を留めないのである。

サンタ・カタリーナ教会などとは異なって、聖霊修道院は震災後ついに再建がなされず、敷地には別種の建造物が構築された。したがって、施設の構造も明確に把握できないが、中核をなす聖堂についてはつぎのような記録が遺されている。

花網装飾の石門が聖堂の正面をなし、堂内には三つの身廊と、一対の円柱に支えられた聖歌隊席がある。これらの身廊を区分する五つの拱きょう構は短い円柱を基盤とし、すべて彩色されている。拱構の両面を飾るのは、金色の額縁に収めた板絵であり、上部には象眼細工の台輪が組まれた。

中央の身廊は宝石を鏤めた五つの窓に照らされ、天井には華麗な絵画が描かれた。神父たちは大礼拝堂にも円柱と円柱を配し、ふたつの窓から採光した。壁面の内装には方形の石材に花模様が刻まれた。祭壇の背後はふたつの石柱に支えられて青みを帯びた黒石が組まれ、上方は拱構をなしている。説教壇は幅広く、椅子は金色の木彫である。礼拝堂の側廊にはそれぞれ祭壇が祀られた。

聖霊修道院に関するポルタルの証言は、前節で示したとおり、まず地震の発生に集中し、居住者の受難と建物の倒壊を語っている。右記の記録と併せて推断すれば、聖堂では正面をなす花綱装飾の石門が倒れ、拱構で仕切られた身廊は完全に破壊された。穹窿も円柱で支えられた聖歌隊席へ崩れ落ちた。ついでさきの引用のように、街路から襲った火焰は、まず身廊の屋根を捉え、聖堂全体が炎上したのである。祭壇のあらゆる聖像、燦然たる聖体顕示台、宝玉を鏤めた光背も燃えた。

金糸で精妙に刺繍された銀色の装具一式も同じく焼失した。神の祝福を受けた国王ジョアン五世がゼノアに発注された品である。それは上祭服、ミサ用の法衣、長袍祭服、さらには祭壇の飾り布、説教壇の垂れ幕、書見台らしきものから成っていた。七千クルードの価値と思われる。

金色に織られた珍奇な紫色の装具も燃えた。これも上祭服とふたつの瀟洒な台、金糸銀糸を織り込んだ長袍祭服、祭壇の飾り布、説教壇の垂れ幕、書見台という一式であった。

古式の金糸で刺繍された装具、すなわち大礼拝堂の祭壇で用いられる長袍祭服、上祭服、飾り布という一式も失われた。

白金に輝き、国王ヨハニム五世陛下が献納された装具、すなわち七着の長袍祭服、上祭服、ミサ用の法衣、祭壇の飾り布、説教壇の垂れ幕、書見台の一式も焼尽し、他の祭壇で用いられる白金ダマスコ織り上祭服もすべて同様である。主祭壇の豪華な飾り布は、素材の黄金を寄進されたその方に因

Margarida Calado, Antes do Terremoto : o Chiado dos Conventos, Faculdade do

Belas-Artes da Universidade de Lisboa. pp.99-100. online.

んで、公爵夫人と呼ばれるが、金槌で叩いたように破壊された。金の刺繍を施した銀製のセバストロ像は、アヤ侯爵夫人が献納し、一五〇枚の金貨、四千八〇〇にも相当するが、同じく焼失した。その他多くのやや地味な品々、黄金の房を付け、多様に彩色されたビロードの葬具も同様である。聖フランシスコ・デ・サレスと聖アンナの祭壇で用いる貴重な飾り布と上祭服、要するに繊細な金糸で刺繍され、多様に彩色されたすべての飾り布と上祭服が焼尽したのである。

種々の燈明も消えた。敬虔の灯火五つは別として、多くの銀の燭台、あらゆる祭壇の蝋燭が焼尽した。聖ペドロ、聖アントニオ、聖リボリオと命名された身廊に、十五の聖像は置かれたが、それらの光輪も全焼した。交差廊の右手にある祈祷室では、磔刑されたイエスが聖母マリアに抱かれていた。主祭壇には聖母被昇天像が中央に、聖カルロスが左側、聖フェリツペ・ネリは右側に置かれた。サンタ・アンナでも聖母受胎告知像が中央、片側に聖アンナ、他の側に聖ヨワキムがあった。聖フランシスコ・デ・サレス礼拝堂では外側にふたつの壁龕へきがんがあつて、聖カテリーナと聖ゲルチルーデスが祀られる。サンタ・アンナ身廊ではサン・ペドロ身廊へ通じる交差路の外側にイエス、マリア、ジョセフの三聖像を祀る祭壇があつた。

聖ペドロ礼拝堂、敬虔礼拝堂、聖アンナ礼拝堂およびイエス・マリア・ジョセフ礼拝堂の天蓋には、金色に彫刻され、聖遺物を収める櫃があつた。聖フランシスコ・デ・サレス礼拝堂のふたつの櫃には聖者の生涯を描いた板絵が蔵された。この礼拝堂は多彩な宝玉の象眼細工で飾られ、日に四度ミサを行うよう、レインハ・フランセザ様の指示で床は板張りされていた。主礼拝堂も大理石で多彩な象眼細工がなされ、聖霊兄弟に守護される。教会の本体は箱形の建物で、交差廊まで百パルモ＋（一パルモは二センチ）、さらにそこから神父の墓掘と聖なる道まで十五か十六パルモである。さらに百パルモ進んだ回廊の上方では三つの身廊が地震で崩れていた。これらすべてが火災によつて灰燼に歸し、いまやなんらの痕跡もない。

火の手は聖具保管室にも及んだ。尊敬すべき聖職祿受領者、アントニオ・コスタ・クート様が寄進され、大箱の上に飾られたロザリオ像は、地震で倒れたのち、火焰で燃えた。小聖具保管室でもすべて焼き尽くされ、パレオの銀の笏くわし、祈祷行列に用いる金飾り銀の十字架、ぶどう酒入れ聖具、銀の皿、水差しを失った。なおまた、聖具保管室の戸棚と木箱に収納される多くの貨

幣も消えた。

祭壇の飾り布や銀の燭台とともに、オラトリオ会祈祷室も焼尽した。荒野の崇高なイエス像、十字架像、両側に置かれたふたつの聖像など多く作品も燃え尽きた。

聖体を拝受する祈祷行列のため用意されたダマスク織の修道院旗幟、われらの尊者に因む貴重な旗幟も焼失した。また、ダマスカス織で覆われぬ障壁の空間を埋める板絵、ベント・コルホの制作になる板絵も燃えた。

言うまでもなく聖堂は、典礼を捧げる衆会の場であり、奥まった中心的な位置に祭壇が据えられる。豪華な卓布を敷いた祭壇は、救世主イエスが現在化される場であり、黄金の十字架像と敬虔なマリア像が祀られた。典礼の頂点に供する十字架は、キリストの復活を象徴し、受難のみならず栄光をも示すとさせる。

聖堂中央の広い空間は、三つの身廊が区分けされ、光背に輝く十五の聖像が置かれていた。国王から献呈された聖体顕示器は祭壇中央の聖櫃に安置され、銀の燭台は主への崇敬として、多くは祭壇の近くに置かれた。ジョアン五世がゼノアに発注した上祭服や飾り布、アヤ夫人の献納によるセバスト口像、コルホの制作した板絵、さらにはトロヤノ神父の寄贈による聖遺物、客死した同輩の形見である聖母像、高位聖職者マノエルによって購入された掛け時計。これらをめぐるポルトルの叙述は、震災による被害の細目を示すだけでなく、修道院の聖像や聖器がどのような信仰と熱意によって整えられたかを語っている。

古修道院の高みにある回廊へも火焰は拡がって、余さずそこを破壊したあと、聖バルバラ祈祷室を焼尽させた。黄金ではなく、木彫りの彫刻を配した礼拝堂、さらに陸離たる絵画で際立つ僧坊もそのとき燃えた。これら回廊の全焼に加えて、神父らの白衣や黒衣を収めた衣装部屋も燃え、聖母マリアを祀る受胎告知祈祷室も灰燼に帰した。そこにはブドウの樹で作られた、小瓶を携える小さな聖像があり、内陣の聖母像と同じく尊いものとして壁龕に収

Portal, *op.cit.*, pp.617-618.

カトリックにおける典礼や祭具については左記の書物を参照した。

高橋保行ほか著『教会建築』日本基督教団出版局、一九八五年。六六・七〇頁。

められていた。祭壇のさまざまな聖者像のなかに、黄金の台座に座した小さな半身像がふたつあり、一方は聖遺物を携えた聖フィリップ・ネリ、他方は同じく聖遺物を手にした聖カミーロ・デ・レリスで、いずれもマヌエル・ジヨゼ・トロヤノ神父が寄進されたものであった。清浄な祈祷室であるのに、結局は灰燼に帰した。この祈祷室では夕食のあとに九時から聖母受胎の神秘に関する夜半の講話のため修学生が集まり、翌日六時半まで学ぶのである。同様に聖トマズの日この聖者について哲学的な弁論が競われた。

類焼した回廊脇の物置には、四旬節の設営用具や聖像のあらゆる装備が収納されていた。また、病弱者の衣服、銀の食器、種々の器具を収める物置も焼尽した。こうした銀の食器だけでなく、インドの陶器も病弱者に沢山供された。崇高なる慈善としてディオゴ・マヌエル・クラド神父がその病棟に年一万五千レアルも寄付され、食事にも治療に役立てたのである。マヌエル・フランシスコ同志も四十年間看病を続けられ、崇高な慈愛を発露された。また、それまで三十年にわたって熱心に看護され、病弱者への格別の慈愛をもって尽されたジョアン・サントシ同志は、みずからの生命の危険をも顧みず、患者の援助と救出のため全力を傾けた。悪性の熱病に冒され、入念な看護の必要な神父たちをも、彼は一心に救護した。一年有余の長患いのため、彼らの体力は衰え、不眠を訴えてもいた。ここでは恢復が遠ざかるため、空気を变えるよう慈愛をもって移動が敢行されたのである。

火焰は新回廊の階段から入って、前述の回廊に至る通路を焼き、本修道会の神父の肖像もその際に燃えた。すなわち、ベント・コレイラ、ヴィセンテ・ディアス、ペドロ・アルヴェルス、アントニオ・デ・ファリア、セバスティアン・リベイロ、マヌエル・コンシエンディア、ジョアン・ダ・グアララ、アントニオ・デ・アタイデ、ディアゴ・クラド、それに同志マヌエル・ドス・サントスの肖像であって、これらの方々は優れた文筆と徳操で著名である。

マヌエル・ディオゴ・ヴェルネイ神父は、清浄な木彫りを収める大きな壁龕を造るよう指示され、そこには外枠と装飾、さらには黄金で房べりされたタマスコ織りの幕も付せられた。この方は司祭任命権をも誠実に果たされた。激震で倒壊した回廊へも火の手は拡がり、控訴院ジョアン・デ・アブレウ裁判官から修道会に寄贈されたキリスト十字架像の板絵を焼いた。多年ここに来駕された彼は、控訴院裁判官の職務を終生果されるとともに、大学におい

て文学と道徳を講じておられる。同じく火焰は他の板絵とともに幼な子を抱いた聖母像を焼尽する。その聖母像は敬愛する私の同窓ヘンリック・コレア神父が所有したもので、彼はローマで歿し、埋葬された同僚マノエル・アルメイダ神父と同じく、上司の指令でそこに派遣され、ポルトガルへの帰途窮乏のため逝去したのである。ディアゴ・ヴェルネイ神父がその形見を回廊に祀った。そこに相応しく、高位聖職者フランシスコ・マノエル神父が購入された大きな掛時計もやはり燃えた。

祈祷室への回廊は前述のとおりディアゴ・ヴェルネイ神父の指示で整備され、その礼拝堂はヘンリックコレア神父がローマで求めた聖遺物の神殿をなし、華麗な絵図で飾られていたが、地震のためすべて倒壊し、回廊の壁面の図像や地下の宝物が延焼によって一切失われた。神父たちの居室に置かれた物品もみな火焰を避けえなかった。

高位聖職者フランシスコ・マノエル様の裁可に合格するよう、ラテン語の講義が回廊の土間でしばしばなされた。広大な空間であつて、マノエル・アントニオ・ペレイラ神父は二百人の修学生に修道会の輝かしい栄光や創始者の偉大で傑出した功績について教えた。

講堂では穹窿の片側を支え大理石の拱門があり、地震によつて講堂と食堂へ崩れ、回廊下の全居室を破壊した。このとき持ち堪えたのは、講堂の外壁と障壁の間に設けられた準備室のみである。

こうしたポルタルの記述のなかで、とくに印象に残るのは、回廊の意義と構造である。修道院における、建築史家ブラウンフェルスはクリュニー会ペトルス・ウエラビリス修道院を分析して、回廊の重要性についてつぎのように述べる。一
二世紀ブルゴーニュに造営されたこの建物では、世界解釈・救済解釈を表現する彫刻に、聖堂と回廊が飾られていた。回廊の壁柱に十二使徒が浮彫にされ、円柱の柱頭には、新約・旧約聖書の事蹟が刻まれる。こうした厳肅で華麗な回廊が指導と省察の場となり、クリュニーを先駆として修道院建築の第一主題となつた、と。
五世紀のち聖霊修道院においても回廊が、十字架像、聖母マリア像、守

Portal, *op.cit.*, pp.618-619.

ブラウンフェルス著、前掲、一一一一一四頁。

護聖人像、さらにはさまざまな壁龕^{へきがん}や板絵や陶板で飾られ、その土間で修学生への講義もなされたことが、ポルタルの記録によって知られる。なお、おそらく丘陵の斜面を活かして、この修道院では上下に回廊が配された。二層の回廊は聖堂、祈祷堂、僧坊、食堂等への往来を至便にするとともに、複雑な建築構造へと導き、ひいては地震の被害を拡大したと思われる。古来丘陵に位置する修道院も、多くは頂上の平地に築かれているが、アッシジのサン・フランシスコ修道院は山腹の急斜面に建設され、入り組んだ通路や中庭が絵画的な印象を与えるとされる。

これらの施設には種々の書類や保管物、さらには貴重な聖体顕示器が収められ、救出のため死の危険と孤立の事態を身を曝すことになる。燃えさかる火焰にすべてが焼き尽くされた。いま述べた聖体顕示器、保管物、あらゆる書類と供託の金貨・銀貨を収めた鉄製の金庫もそこに含まれるが、一層深刻な打撃として文物収蔵所が壊滅し、土地契約書、公正証書、建物所有証、聖具納室と礼拝堂の所蔵目録、修道会に関する無数の書類、きわめて重要な文書の稿本、修道会の全議事録、必需品の供給記録、ローマ教皇の書簡、歴史遺産、発見遺物、修道会独自のあらゆる褒章が焼尽したのである。同じく火焰は新回廊下の建物すべて、さらには古修道院の穹窿と主壁を焼いた。地震によるこれらの被害は窓、出口、床などに止まり、居住者も逃れえたのである。彼らが払う家賃は、修道会にとって毎年三千クルドの収入になっていた。

広大な施設と大勢の居住者を擁する修道院のあらゆる食糧、小麦、オリーブ油、ブドウ酒、野菜、米などすべてが、厨房と貯蔵室への延焼によって失われた。高価ではないが、精巧に作られたすべての錫製品、銅食器、敷物も食堂のすべての設備とともに同じく焼けた。かくして八つのガラス窓と大きな石造りの穹窿を備えた食堂、さほど大きくはないが、彩色陶板を組んだ石造りの穹窿と六つのガラス窓を備えた軒続きの祈祷室が燃え尽きた。一言で表現すれば、私たちの罪過のため、この修道院全体が地震によって倒壊し、火焰によって壊滅したのである。

本修道会はジヨゼ・ピント神父から二万クルザドで若干の建物を購入したが、その手数料一万三千レイをも、さきに述べた年収三千クルザドとは別に

失った。以上のほか多くの家財が焼尽したり、破損したり、埋没した。
ネセシダスの修道院では七棟の建物も焼け、収益の大きな損失となったが、
火災による大規模な破壊は免れた。私たちの罪過を寛恕された神に、衷心か
ら感謝を捧げる。

初出 二〇一四年九月二七日